

# 近現代史の多面的・多角的な考察

—吉田茂と戦後日本政治—

坂本 健蔵<sup>1</sup>

1. はじめに
2. 生い立ちと家系
3. 外交官吉田の活動
4. 戦後政治を方向づけた吉田
5. エピソードからみる吉田の人物像
6. おわりに

## 1 はじめに

戦後日本における歴史教科書の一大欠陥は、歴史の表面的な事象、事件の羅列を記述することに注力されていることであり、生徒はそれをひたすら覚えていくことに重点が置かれていることである。そこには歴史をつくった人物が描かれておらず、出来事の因果関係もわからないようになっている。歴史の授業における時間的制限もあり、このような無味乾燥な歴史教育は、結果的に生徒たちに歴史に対する興味を失わせ、歴史を敬遠させる原因となっている。過去の人間の営みや歴史の襞に触れるためには、専ら教科書以外の歴史読み物に求めなくてはならないのがわが国の実情である。

大人でもそうであるが子供に歴史への興味を抱かせる最良の方法は、歴史上の人物を取り上げ、その人物を通して歴史をみていくことである。

戦後日本政治の出発にあたり、「吉田茂」(明治 11 (1878) 年 9 月 22 日 - 昭和 42 (1967) 年 10 月 20 日) の存在をはずすことはできない。吉田は、戦後まもない昭和二十年代通算 7 年あまりにわたり首相をつとめ、日本の方向性を定めた政治家である。政治家としての吉田が戦後日本の針路に影響を与えた点を大別すると以下の 4 点を挙げる事が可能である。

- ① 全面講和を退け、多数講和を選択して早期独立を達成
- ② 日米同盟 (安全保障条約) を締結し、日本を西側自由主義陣営に組み入れる。
- ③ 「軽武装・経済発展優先」路線の選択 (「吉田ドクトリン」)
- ④ 保守政治家を育て、自由民主党の源流となる

ここから戦後今日までの日本はまさに吉田の政治活動と政治決断によって歩んでいるこ

---

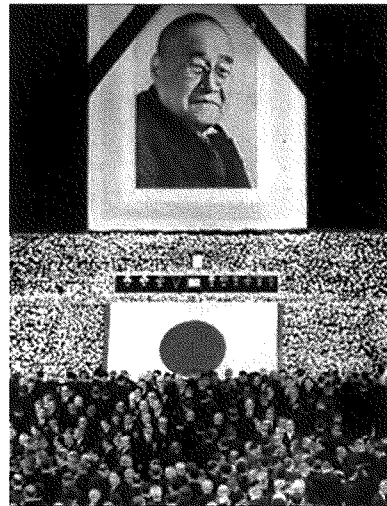
<sup>1</sup> 平成国際大学教授

とがわかる。しかし、吉田が首相として活動していた時期、吉田は野党やマスコミによって激烈な批判にさらされており、その非難は通常の神経の持ち主であれば即座に政権を投げ出すほど猖獗をきわめたものであった。しかし、「戦争に負けて、外交にかった例はある」という信念の下、命がけで日本の再興に取り組んでいた吉田は、今日の日本でもみられる大衆迎合主義を排し、それらに屈しなかった。政治家の評価は後世の人々が決する、という言葉があるが、事実政界を引退し、鬼籍に入った後の吉田の評価は首相現役時代をひっくり返したものとなっている。昭和 42 年に逝去した吉田の葬儀が今日に至るまで戦後唯一の「国葬」となっているのがその証左である。

では、吉田は日本の激動期においてどのような活動を行っていたのであろうか。



\*1 吉田政治を揶揄した風刺は新聞紙上を賑わせた。



\*2 戦後唯一の国葬(昭和 42 年 10 月 31 日)

## 2 生き立ちと家系

明治 11 年、「吉田」茂は自由民権運動家であり土佐藩士であった竹内綱の五男として東京に生まれた。竹内は維新後実業家をしながら民権運動に取り組み、後には衆議院議員となっている。竹内家に生まれながら茂が吉田姓となったのは、生誕後すぐに竹内の親友「吉田健三」に養子として迎えられたためであった。健三は、もともと福井藩士であったが、脱藩して英国に密航した後、2 年間英国で学んで帰国した後貿易商として巨万の財産を築いた人物である。しかし、茂がまだ 11 歳のとき逝去し、茂には莫大な遺産を残されることになった。

神奈川県の大磯町で義母吉田仕に育てられた吉田は、私塾であった耕余義塾で過ごした後、いくつかの学校を短期間で転々とし、明治 37(1904)年東京帝国大学法科大学政治学科へ編入学し、同 39(1906)年同校を卒業した。同年外交官試験に合格し、外交官の道を歩み始めることとなった。

明治 42(1909)年、牧野伸顕の長女雪子と結婚する。牧野は、維新の元勳大久保利通の次男で、後に外相や文相等をつとめ、宮内大臣、内大臣となって宮中に入った人物であり、

薩摩閥にも連なる有力者である。こうした閥閥が後に、吉田の外交官、政治家としての活動に大きな影響を及ぼすこととなる。

吉田は二男三女の子宝にめぐまれ、長男は英文学者として著名な吉田健一である。第 92 代首相麻生太郎を長男として生んだのが三女の和子であり、九州を代表する実業家麻生多賀吉に嫁入りし、吉田の私設秘書としても陰に陽に活動した。吉田を取り巻くこうした環境が外交官として、また政治家としての支えとなった。

### 3 外交官吉田の活動

#### (i) 大陸權益をめぐり奔走

「A 級戦犯」としてしられる広田弘毅らと同期で外務省に入省した吉田は、天津の領事館補に任ぜられたことを振り出しに、明治 40(1907)年には満洲・奉天、翌年にはロンドン在勤、42(1909)年には大使館三等書記官に任ぜられイタリア在勤を命ぜられる。大正元(1912)年満洲の安東領事を命ぜられ、同 5(1916)年までその任にあたる。大正 7(1918)年には山東省済南の領事を命ぜられた。大正 9 年大使館一等書記官に任ぜられ、再びイギリス在勤を命ぜられる。大正 11(1922)年には、総領事として再度の天津勤務、同 14 年には、奉天総領事に命ぜられ、昭和 2(1927)年まで在勤する。同 3(1928)年吉田は外務次官となり、田中義一、幣原喜重郎の二代の外相に仕えた。昭和 5(1930)年には駐伊大使に命ぜられ、同 7(1932)年まで勤務する。昭和 10(1935)年外務省退官後、翌年には広田内閣の外相候補に一時擬せられた。その後、吉田は駐英大使を命ぜられ、昭和 13(1938)年 9 月までロンドンに勤務した。同 14(1939)年 3 月、依願免本官となり外交官としてのキャリアを終えることとなった。

このような経歴をみればわかる通り、外交官としての吉田は、断続的ながら長く中国大陸でその活動を送っていることがわかる。外務省において欧米諸国の勤務が出世の表街道であったのに対し、チャイナサービス（中国勤務）は「裏街道」といわれた。日本にとってきわめて重要でありながら、現地での生活水準も低い上、面倒な外交が展開される当地は外務官僚にとって人気がないのは想像に難くない。しかし、吉田は後年、「負け惜しみでなく、今にして思うと、支那大陸に早くから勤務できたことは、私としては非常に得るところがあった」と回顧している。日露戦争後領土となった朝鮮半島に隣接し、獲得した權益が所在する大陸において、張作霖などの現地政治家や馬賊との交渉、列強勢力との駆け引き、陸軍など諸々の出先機関と交渉しながら、国益の維持・増進に奔走したのであった。こうした勤務経験が外交官として、政治家としての吉田の能力を飛躍させたといえる。

#### (ii) 対英米協調に尽力

近代日本、あるいは今日においても日本外交のテーマとしてしばしば頭を擡げるのは、欧米協調か、アジア連帯かという路線をめぐるものである。欧米とりわけ世界の覇権を掌握していた英米と協調し、パックスアングロアメリカナの下外交を展開していくのか、地理的に近接するアジア諸国の立場に立って英米との対立も厭わないかという問題が日本外交の節目節目に顔を出していた。戦前期、とりわけ日露戦争後から敗戦に至る過程にお

いてはこの問題は深刻であり、最終的に後者へ傾斜した日本は大東亜戦争に突入することとなった。

吉田は、この外交路線の問題においては、常に英米との協調路線と日本外交のとるべき方策と考え、そのように提言し活動していた。ワシントン体制下、排外運動にさらされた大陸の権益問題においても英国との協調によってこれを抑制しようとはかった。米国が提唱国となった不戦条約批准問題が生じた際、外務次官であった吉田は職を賭して批准の成立のため行動した。満洲事変が起きた際も、駐伊大使であった吉田は国際連盟との妥協をはかり連盟内に踏みとどまるよう外交活動を行った。日華事変前後、中国との対立が深まるとともに英米との対立が深刻化するが、その際も英国との協力による解決を目指したのであった。

2・26事件勃発後、広田内閣が発足するが、当初吉田は外相候補に擬された。しかし、牧野の女婿であり英米派とみられ、陸軍によってそのポストから遠ざけられた。

戦前期の反欧米思潮が隆々たるなか、少数派の親英米派として外交官活動を行ったのであった。

### (iii) 反戦・和平に挺身

非常時下における吉田の活動として顕著なのが、戦争阻止に向けた活動、および早期戦争終結に向けた活動である。吉田は、駐英大使を勤め上げ帰朝すると、岳父の牧野と密接に連絡を取り合いながら、日華事変の解決、対英米戦争の阻止に向けて様々な活動・工作を行った。例えば、当時陸軍主流に疎まれていた宇垣一成大将を擁立することによって日華間の和平を試みることを目指したり、実現すると英米との対決が確実となる独伊との同盟締結を阻止する運動を行った。日米関係が日に日に深刻化するなか、J・グルー駐日大使とはかり、日米の妥協点を見出そうと奔走した。開戦後も和平のための様々な工作を行い、即時停戦の必要を認めたいいわゆる近衛上奏文に関与した咎で憲兵隊に逮捕、投獄された。

戦後の「反戦平和」運動は、非現実的ユートピア的なものであったり、共産革命を実現するためイデオロギーからでたものばかりである。吉田の場合それとは対極な、真の救国活動であった。しかも、当時の吉田は公人の立場にはなく、政治的には無役であったにもかかわらず和平実現に一身を捧げていたのであった。

## 4 戦後政治を方向づけた吉田

### (i) 政界入りのきっかけ

ポツダム宣言を受諾し敗戦国家となった日本は、連合国、実質的には米国の占領統治下に入ることになった。大都市が空爆された上、二発の原爆投下と餓死者がでることも予想された経済的困窮のさなかに当時の日本はあった。

吉田は終戦後まもなく、東久邇宮内閣と、それに続く幣原内閣で外務大臣に迎えられた。戦後日本のスタートとともに吉田は政治外交の前線ではたらくこととなった。占領統治下において、対米英戦や戦時体制に積極的に与した人物が政治の中枢から排除される中、戦

時下における吉田の果敢な行動が財産となり、日本の運命を左右することができる活躍の場が吉田に提供されたのであった。

当時吉田が外相となることが発表されると、それを不思議がる声が出た。なぜなら、内務官僚出身で小磯内閣、米内内閣で閣僚をつとめたもう一人の「吉田茂」が存在し、世間の人々は戦時体制の中心にいた「吉田茂」がなぜ閣僚になるのだろうか、と訝ったからである。当時知名度からいえば、内務官僚の吉田茂の方が高かったのである。

昭和 21(1946)年 4 月に戦後初の総選挙が実施され、これをうけて幣原内閣の後継として第一党自由党の総裁鳩山一郎が後継首班として有力となったが、鳩山はそのタイミングで公職追放を受けてしまった。鳩山やその周辺は鳩山に代わって自由党を任せられ、首相となる人物を探した結果、吉田に白羽の矢がたった。政党政治に関わった経験のない吉田は、この打診を固辞し続けたが、最終的に以下の三条件を付した上で引き受けることとなった。

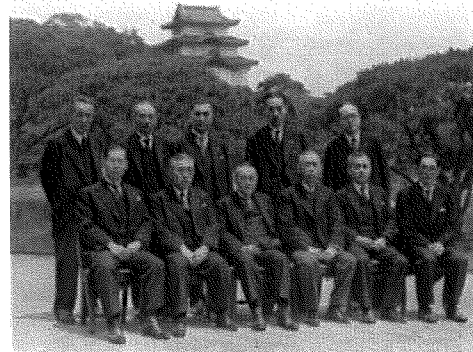
- ① 金作りは一切やらない
- ② 閣僚の選考に一切の口出しは無用
- ③ 辞めなくなったらいつでも辞める

ここから、吉田が権力者としての野心も、政党政治家としての意気込みも、長期政権への抱負も抱いていないことが見て取れる。鳩山に代わる短期登板を自分のやりたいようにやる、という気持ちでのぞんだものであった。

ところが、吉田の思惑と世間の予想に反し、吉田は断続的ながら 5 次にわたり、通算 7 年以上も政権を担い続けることになった。こうして自由党総裁、首相となった吉田は、国内の社会主義・共産主義勢力の台頭のなか占領状態からの脱却、経済復興、国際社会への復帰という難題に取り組むことになった。



\*3 幣原内閣に外相として入閣(前列右端)



\*4 第 1 次吉田内閣の発足(前列左から 3 番目が吉)

#### (ii) 早期に「独立主権」を回復し、日米同盟を締結

吉田がその後の日本の行方に影響を与えた代表的功績として 4 つを挙げる事が出来る。

第一に、昭和 26 (1951) 年 9 月サンフランシスコ講和条約を締結し、日本を占領状態からの脱却へ導いたことである。戦争に敗北したとはいえ、いかなる国であっても他国の主権下に置かれ続けることは望まない。ところが、当時の日本においては「全面講和」か、「単独講和」かという議論があり、マスコミ・野党・学者の多数は前者を支持する声で圧倒していた。しかし、国共内戦や朝鮮戦争といった近隣アジアにおいて熱い冷戦がはじまっており、現実にはソ連を中心とした東側諸国を含む講和は条件の面から不可能な状況で

あった。こうしたなか、何よりも早期に独立し主権を回復することが必要と考える吉田は、全ての旧連合国との講和という非現実的方策を退け、米国をはじめとした多数の国々との講和を選択した。こうして独立主権国家として日本は再び世界の舞台に立つことになったのである。もしこの時吉田が、マスコミや「世論」の攻撃に腰砕けとなっていたら日本は少なくとも冷戦終結までの数十年間占領状態のままであったであろう。

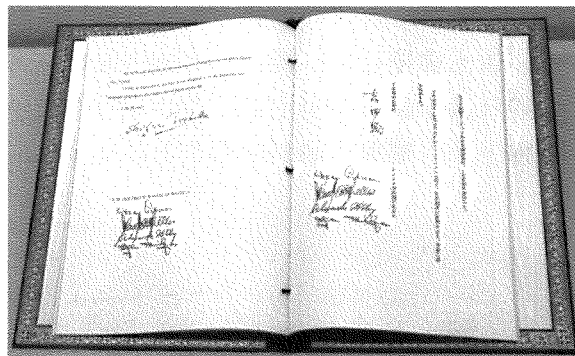
第二に、吉田は講和条約が調印された同日、日米安全保障条約を米国との間に結んだ。これにより日本は西側自由主義陣営に組み込まれることになった。

このとき同行した当時の蔵相であり後に首相になる池田勇人に対し、この条約は評判が良くないため君の経歴に傷がつくからと述べ、条約への署名は吉田のみで行った。今日、水や空気のごとく当たり前のよう存在し日本の平和に貢献している日米安保は、吉田一人の責任で始まったものなのである。

吉田がこのように、講和や安保においてとった政治行動は、吉田の歴史観、国際政治観からでたものである。政界引退後、吉田は日本の進むべき方向性について論じるなか、「わが国は政治的にも、経済的にも、英米と協調した時期において躍進した。日本は海洋国家である。従って海洋勢力と手を握るべき立場にあるのである」、と。英米との連携協力こそが日本の平和と繁栄にとって鍵をにぎるものとするのが、吉田の外交上の信念であった。吉田の戦前から一貫した対英米協調行動は、彼の外交哲学がもたらしたものであった。



\*5 講和条約に調印する吉田



\*6 日米安保条約調印文書。日本側では吉田のみが署名する。(外務省外交史料館所蔵)

### (iii) 「軽武装・経済発展優先」路線の選択（「吉田ドクトリン」）

第2次安倍内閣において集団的自衛権の行使を容認する憲法解釈が行われ、それに基づく安全保障法制が成立した。膨張する中国や冒険政策を繰り返す北朝鮮の状況を受けての対応である。しかしながら、これに対する反対論が野党、マスコミを中心に高い盛り上がりを見せた。防衛問題が国会で審議される度に、軍事アレルギー的反応がみられるのは「戦争の放棄」を規定する憲法9条の存在があるのはもちろんのこと、いわゆる「吉田ドクトリン」の存在も見逃すことが出来ない。吉田ドクトリンは、軍備を出来るだけ少なくし、経済発展に専念する政策を指すものであるが、吉田自身がそのように命名したものではなく、後に吉田の政策を指してそう呼称されたものである。この吉田ドクトリンなるものが、憲法と同じように戦後日本の国定方針のようにみなされ、防衛問題について思考停止状態が続いてきた。それは政権を担い続けてきた自民党内にも浸透し、吉田直系派閥の一つで

ある宏池会などはその中心的存在であった。

ところが、吉田が朝鮮戦争をうけて米国政府の再軍備要求に抵抗し、軽武装、経済発展重視政策を打ち出していたのは、まずは経済と国民生活を立て直すことを最優先に考えていたからである。敗戦によって打ちひしがれ疲弊した経済にとって、再軍備は負担以外の何ものでもなかった。吉田は晩年、憲法改正による再軍備の必要を主張していたし、必要であれば核武装も選択肢であると述べることもあった。吉田が逝去する年には日本はGNP世界第2位、翌年には世界第3位に躍り出るほどに日本経済は復活を遂げており、吉田の軍備に対する考えは経済次第であったのは明らかである。しかしながら、吉田の意に反し、首相時代に吉田が打ち出した政策が「吉田ドクトリン」と呼ばれ、誤った解釈の下日本を縛り続けることとなったのである。

#### (iv) 保守政治家の育成

鳩山の公職追放を受けて政権の座についた吉田は、次第に政党政治に本格的に取り組んでいった。党人派といわれる生粋の政党人とは肌合いが合わず、行政実務能力の高い官僚出身者を積極的にリクルートし国会議員とした。こうして自由党内を吉田の息のかかった議員ら(いわゆる「吉田学校」出身者)で固め、党を掌握した。鳩山グループからみると、単なる鳩山の一時的代役であり使い捨てのつもりであった吉田に、まさに庇を貸して母屋を乗っ取られる事態となってしまった。

こうして吉田に引き立てられた官僚派政治家の代表が、後に首相となる池田や佐藤栄作等である。そして自民党内で池田が率いた派閥と佐藤が率いた派閥およびそれらの後継派閥が、小泉純一郎政権が誕生するまで長く自民党政権内の主流派を形成し、日本政治の中心に存在したのである。



\*7 総選挙勝利を喜ぶ吉田(前列左)と佐藤(同)



\*8 吉田学校の優等生 佐藤(左)と池田(右)

## 5 エピソードからみる吉田の人物像

吉田は士族の家系に生まれ、当時の上流階級、富裕階級の出である。東京帝大を卒業した生粋の外務官僚として社会人生活を送った。その経歴だけみると、エリートであり官僚臭ただよう硬直した人物像を想像しがちである。しかし、吉田には人間味溢れるエピソードが多々ある。よく知られている南原繁東大総長を評した「曲学阿世の徒」、解散総選挙につながったいわゆる「バカヤロー」発言など「放言」、「失言」などもその一端である。彼

の人間の魅力は、政党政治家となった後衆望を集める源泉となった。

#### 【英語力】

通常外交官は語学が堪能であるのが当たり前であるが、世界の共通語である英語については決して得意でなかったようである。外交官時代、任地でのパーティーの際英語でスピーチしたところ、それを聞いた英国人は「日本語って、意外に英語に似ているな」という感想を漏らしたという。このエピソードから、吉田の英語力が推測できる。戦前の外務省において本省のエリートは、幣原をはじめ英語力の高い人物ばかりであった。その意味で吉田が「裏街道」へまわされたのもやむを得ないところなのであろう。

しかし、吉田の例からわかることは、優れた外交官として求められる素養は、語学は二の次だということである。その人が有する歴史観や哲学、教養が重要であり、断固として国益を守ることができる人物こそが優れた外交官ではないだろうか。戦後のわが国の外交官の中には「チャイナ・スクール」といわれる外交官の中に、日本の国益よりも中国の国益に資するような言動をする人物が多く出現し、日本の国益を損ねてきた。語学力はあったにこしたことはないが、あくまでもそれは外交官として付随した能力の一つと考えるべきではないだろうか。

#### 【巨額の遺産を継承】

先述したように、吉田は11歳で養父を亡くした。遺産として「50万円」を相続したという。この金額は、現在の貨幣価値に直すと、数十億ともいわれる。吉田自身その身上を「吉田財閥」と、冗談めかしていていた。ところが、終戦の頃までには、大磯にある自邸不動産以外めぼしい財産はなくなっていたという。吉田は、何に蕩尽したのであろうか。実は、戦前期の外交官は、財産を有した者でなければ仕事が難しかった。なぜなら、任地において各国大使館が主催するパーティーに頻繁に参加し、日本大使館においてもそれを開催しなければならない。国家を代表しているので、恥ずかしい生活は出来ず、派手に見栄もはらねばならない。その費用は、外務省からでる給料や経費で用立てることはとても無理な話であった。現地で積極的な外交工作をやるにおいても、やはりそれなりに金銭が必要となる。したがって、本人の出自がもともと金持ちか、資産家の娘を娶ることが外交官の職務を遂行する上で重要であった。加藤高明が三菱財閥の創業者・岩崎弥太郎の長女と、幣原が同じくその四女を娶っているのも、そうした事情と無関係ではない。そういった意味で吉田は、義父のおかげで外交官になる要件をはじめから備えていたといえる。

では、終戦後の政治家としての活動は、どのような背景で行われたのであろうか。政道を率いて選挙に勝利し、政権の座を維持し続けるには莫大な金が必要である。今日のように政治資金に関する規制法がないその当時、使える資金に上限がないため金がある方が優位に立てるのは自明である。吉田は、先述したように終戦時には自邸しか財産らしいものはなかった。しかし、吉田の三女和子の嫁いだ先は九州で石炭やセメント業のほか、手広くビジネスを展開していた麻生家である。この「麻生財閥」から吉田は政治資金その他を得ていたようである。政党政治家になってからの吉田は、これを金庫がわりに活動を行っていたようである。

吉田が後顧の憂いなく思い切った外交官、政治活動ができたのはこうした恵まれた経済

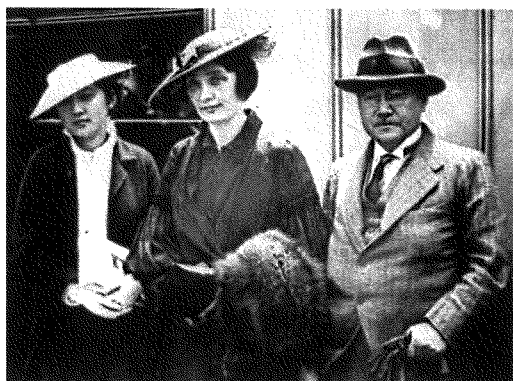


環境と無縁ではない。吉田は強運の人ともいえる。政治家が国家国益のため邁進するためには、やはり先立つものが必要であろう。

#### 【夫婦の関係】

政官界の有力者であった牧野伸顕の娘・雪子をもらったことで、吉田は外交官として有力な閥閥に連なった。しかし吉田と雪子の夫婦仲はいつも仲睦まじかったわけではない。華族の出で容貌も美しかった雪子は、大変気位の高い女性で、吉田に対しても風上に立つような姿勢があったようである。現存する複数の写真を見てもそのような印象を受ける。吉田も気位は人一倍強い男だったため、二人が家庭内で衝突することに不思議はない。このため帰宅の足が遠のき、いつの頃からか吉田の待合通いが始まることになる。

昭和 16(1941)年に 51 歳の若さで雪子が亡くなったあと、吉田の身の回りの世話をしたのが「小りんさん」こと坂本喜代である。小りんは、花柳流の名取でもある新橋の芸妓であった。雪子がなくなる前から関係があったようで、昭和 19(1944)年から大磯の吉田邸で生活をともにした。「ワンマン」吉田にとって、亡くなるまでしたがい尽くした小りんとの生活が肌に合ったようである。



\*9 中央が雪子。左が三女和子。



\*10 右端が「小りんさん」こと坂本喜代

## 6 おわりに

本稿では人物として吉田に焦点をあてたが、吉田一人を取り上げるだけで明治、大正、昭和期という激動期日本の政治や外交、また社会の一側面を知ることができることがわかったと思う。その時代における日本の政治外交の課題は何であったのか、政治外交の運営の難しさ、また歴史は制度ではなく人物がつくるものであることも理解できるはずである。歴史上の人物も現在生きている我々とそれほどかわらない同じ人間であることがわかると、親しみがわき歴史への興味を引き立てることができる。日本史にしろ、世界史にしろ折に触れて人物を取り上げ、その人物を通して歴史を語ることは今後の歴史教育にとって最も必要なことではないだろうか。

## 【参考文献】

- 吉田茂『回想十年』（新潮社 昭和 32 年）
- 吉田茂『世界と日本』（番町書房 昭和 38 年）
- 諸氏による「吉田茂追憶」（『霞関会官報』第 260～302 号）
- 細谷千博「外交官・吉田茂の夢と挫折」（『日本外交の座標』＜中央公論社 昭和 54 年＞）
- 細谷千博「日・米・中三極関係の歴史的構図」（『国際問題』第二五四号 昭和 56 年）
- 三谷太郎「二つの吉田茂像」（『二つの戦後』＜築摩書房 昭和 63 年＞）
- 吉田茂記念事業財団編『人間 吉田茂』（中央公論社 1991 年）
- 吉田茂『吉田茂書翰』（中央公論社 1994 年）
- 拙稿『吉田茂と不戦条約』（修士論文 1993 年）
- 内閣総理大臣官房編『故吉田茂国葬儀記録』（大蔵省印刷局 昭和 43 年）
- 中村勝範編著『近代日本政治の諸相』（慶應通信、平成元年）
- 麻生和子『父 吉田茂』（新潮社、2012 年）

## 【写真引用】

- \*1 [https://www.amazon.co.jp/%E6%B8%85%E6%B0%B4%E5%B4%91%E7%94%BB-%E5%90%89%E7%94%B0%E8%8C%82%E8%AB%B7%E5%88%BA%E6%BC%AB%E7%94%BB%E9%9B%86-%E6%B8%85%E6%B0%B4-%E5%B4%91/dp/4120036642/ref=sr\\_1\\_2?ie=UTF8&qid=1488170528&sr=8-2&keywords=%E5%90%89%E7%94%B8C%82%E9%A2%A8%E5%88%BA%E6%BC%AB%E7%94%BB](https://www.amazon.co.jp/%E6%B8%85%E6%B0%B4%E5%B4%91%E7%94%BB-%E5%90%89%E7%94%B0%E8%8C%82%E8%AB%B7%E5%88%BA%E6%BC%AB%E7%94%BB%E9%9B%86-%E6%B8%85%E6%B0%B4-%E5%B4%91/dp/4120036642/ref=sr_1_2?ie=UTF8&qid=1488170528&sr=8-2&keywords=%E5%90%89%E7%94%B8C%82%E9%A2%A8%E5%88%BA%E6%BC%AB%E7%94%BB)
- \*2 <http://blog.goo.ne.jp/hanada1954/m/201606>
- \*3 <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%B9%A3%E5%8E%9F%E5%86%85%E9%96%A3>
- \*4 <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%97%A5%E6%9C%AC%E5%9B%BD%E3%81%A8%E3%82%A2%E3%83%A1%E3%83%AA%E3%82%AB%E5%90%88%E8%A1%86%E5%9B%BD%E3%81%A8%E3%81%AE%E9%96%93%E3%81%AE%E5%AE%89%E5%85%A8%E4%BF%9D%E9%9A%9C%E6%9D%A1%E7%B4%84>
- \*5 [http://www.nikkei.com/news/print-article/%3FRFLG%3D0%26bf%3D0%26ng%3DDGXNASFK2801U\\_Y2A520C1000000%26uah%3DDF110520127586](http://www.nikkei.com/news/print-article/%3FRFLG%3D0%26bf%3D0%26ng%3DDGXNASFK2801U_Y2A520C1000000%26uah%3DDF110520127586)
- \*6 <http://ayobuka.com/2015/01/30/3-perjanjian-inilah-yang-menandai-akhir-dari-perang-dunia-ii/signing-of-us-japan-security-treaty-1951/>
- \*7 <http://showa.mainichi.jp/news/1953/04/26-8e5d.html>
- \*8 <http://zxcv7530.blog.fc2.com/blog-date-20150504.html>
- \*9 <http://omugio.exblog.jp/23452529/>
- \*10 <http://home.r07.itscom.net/miyazaki/bunya/yomayoi.html>